学芸員が選ぶこの１点

福井県立美術館
学芸員　椎野晃史

梶田半古筆「鵯越」明治 25（1892）年
愛媛県美術館蔵

【挿図１】「鵯越」部分拡大

「学芸員が選ぶこの１点」は「鵯越（ひよどりごえ）」（愛媛県美術館蔵）です。画家の梶田半古は明治３（1870）年、金工家の長男として東京に生まれました。日本青年絵画協会の設立し、日本美術院の活動に参加するなど、画壇の中央で活躍する傍ら、小林古径や前田青邨ら次世代の才能ある画家を育てた人物としても知られています。

さて半古は美人画の名手として広く知られる一方で、武者絵も得意としました。本作は現存する武者絵のうち、半古の卓越した技量を存分に発揮した貴重な１点です。画題は源義経の勇武を示す、一ノ谷合戦の名場面です。鵯越と呼ばれた崖を駆け下りて平家軍の虚を突いた有名なシーンで、本作は今まさに屹立した崖から踏み出す瞬間を捉えています。先頭の義経に続くのは、あの武蔵坊弁慶【挿図１】。人物、そしてその鎧の細密描写は実に見事です。前田青邨が「先生が好んで話されたのは、多く故実に関することで、なかなか研究も深かったようである」（前田青邨「梶田半古塾と歴史画」『中央美術』大正６（1917）年５月号）と師の半古について回想しているように、時代考証に長じた半古らしい作品となっています。

半古はディティールに拘って、細緻な表現を見せると同時に、画面下部には大胆な余白を残しています。その虚空にポツンと描かれる一羽の鳥は、単調になりがちの空間をグッと引き締めています。この間の取り方が絶妙で、私が本図を選んだ理由はここにあります。この余白と鳥を画中に描き加えることによって、崖の高さだけではなく、急な斜面をも暗示しているのです。

また目線の誘導が上手い！画面の近景に描かれる樹木の枝と蔦に注目すると、垂直に下へと伸びる枝とその先から垂れる蔦は、自然と鑑賞者の目線を下へと誘導し、鳥へ辿り着くように描かれています。徹底的に計算された画面の構図といえるでしょう。

この作品は、狩野芳崖、菱田春草らの名品に劣らぬ名画と言える作品です。ぜひ近くでゆっくりとご鑑賞ください。